

第109回「さんか・さろん」 まとめ
・2021年8月17日(火)
・海辺の集落で頑張る“げんき大崎”
～持続可能な地域づくりを目指す～
・西川展子さん(げんき大崎 理事)

和歌山県海南市下津町の大崎、海辺の小さな地域の住民有志で活動している団体「げんき大崎」のお話を伺いました。まずは実況中継風にもと漁協倉庫をリノベーションした「かざまち」の1階の販売所・2階のコミュニティスペースをご案内いただきます。「ステンレス台は廃業した旅館からのいただきもの、大崎湾の地ダコを使ったたこ焼き、スタッフのおばちゃん達が機械を出資して買って、儲けて旅行行こうよ、と始めたもの」などという説明が。そして、いよいよ西川さんのお話が始まりました。

.....

<風待ち港・大崎湾を囲んだ集落>



大崎湾を囲んだ大崎集落、人口は約 400 人。高齢化率は 50% 以上。主要産業は農業、漁業、一番大きいのは海運業でタンカー船を運営している方が 11 社ある。

位置は和歌山市から少し南の海南市、ちょっと海に飛び出したところがあり少し窪んだ湾がある、ここが大崎。壺形の湾で沖に無人島「弁天島」がある。大崎の港は、昔“風待ち”港といわれていた。普段は湾



の水面がとても穏やかで、鏡のように景色を映している。夕焼けがとてもきれい。

大崎は、海、山に恵まれ、おいしい食べ物がそろっている。養殖ワカメは天日干しして畳んで販売。2・3月がワカメの季節。魚はアジ、サゴシ、など一本釣りの魚。夏のごちそうは「エビジャコ」と呼んでいる小エビ。茹でたてはビールに合う。これが地域では昔から肉代りで、カレーなどいろいろな料理に使われる。エビジャコは夏場には玉ネギと素麺汁に入れ、一緒に素麺を食べる。地域の伝統料理だ。このエビを使ったちらし寿司は「かきませ」と呼びお祝い事などに作る。



海辺によく生えている笹「ダンチク（あせ）」という笹の

葉でサバの寿司をくるむ「あせ寿司」。熟らしたものは「なれ寿司」。



これも祭りの時とかに家で作っていた。また和歌山は茶粥文化、各家で朝、夜と、ほとんど毎食のように食べている。

<集落消滅の危機感から>

生鮮販売の店は一軒もなくなった。小学校は10年くらい前に閉校、いま大崎に2人しかいない小学生は、タクシーで隣町に登校している。以前、港は船がいっぱいだったが、今は底引きの漁師の船は一艘。みかん畑も放棄地が増えている。平地が少なく、津波の心配がある地域。南海トラフの津波では約80%の家屋が水没するといわれ、家を建て替える若い方は別の地域に家をもつケースが多い。世帯数、人口は10年後には100人減と予測され、空き家も増えている。

「この集落は存続できるのか、消滅してしまわないか」と小学校の閉校が現実になってきたころから考えるようになった。ワークショップでどうしたら元気になるかを話し合い、住民がいろんなアイデアを出した。その案を実行していこうという中で、数人が世話役になって「げんき大崎」というグループを立ち上げた。

そして2015年（平成27年）には、活動拠点として、「かざまち」をオープンするに至った。

<体験で集客。活動のメインは朝市>

活動のなかで一番人が集まってくれたのは「食の体験イベント」。養殖のワカメのメカブの部分は捨てていた。おいしいものなのに活用できていない。こういうものを丸

ごと紹介し、大崎の魅力として発信しようとして、ワカメの刈り取りイベント企画を実行した。ワカメの養殖ロープをクレーンで引き揚げて陸にあげ、皆さんに刈り取りしてもらった。それをメカブ、茎から葉から料理し、あとはしゃぶしゃぶにして食べた。

柑橘もたくさん採れるので、摘み取りに行ったレモンを絞ってポン酢にして食べた。好評で3、4年同じようなイベントをして、多い時は100人くらい参加があり、今の活動にもつながっている。

夏にはブルーベリー収穫。エビジャコ素麺、エビのかき揚げ、エビの塩ゆでをランチに仕立て、体験と食を組み合わせている。

現在の活動の一番メインは「かざまち」で開催する毎週土曜日の「朝市」。一本釣りや磯モノの魚、イカ、カレイ、底引きの魚、といろいろ並ぶ。地元で栽培した野菜の販売も。取り立ての新鮮な野菜が、どれもほとんど100円。



朝市のウリは「お惣菜」。15人くらいのスタッフのおばちゃんたち、最年長85歳、若くて60歳、平均年齢75歳くらいが2チームに分かれて手作りのお惣菜を作っている。季節には「あせ寿司」も商品に並ぶ。お祭りの時は500個以上作って販売。ちらし寿司や巻寿司。手作りコロッケもヒジキが入っていて、定番メニュー。お弁当も人気だ。地ダコのたこ焼きも毎週喜んでもらっている。

<女性たちの技で定食・スイーツ>



土曜日だけ、売っている魚を選んで刺身、煮つけ、フライ、から揚げ、など好みにできるだけだけ応えて調理、それにご飯セットで、お魚の値段に700円プラスして定食に仕立てており、これはじわじわ人気に。おばちゃんたちの技術あってこそだ。

2階はカフェもあり、スイーツも。プロの先生にレッスンしてもらい、美味しさにもこだわって、売れるようになった。マフィンには、地元の素材ハッサクやブルーベリーなどを使う。「台湾カステラ」も人気。地

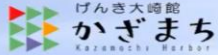
域おこし協力隊の女性が台湾出身で「お年寄りにも喜んでもらえるのでは」との提案で教えてもらい作っている。


<楽しい！自主運営で頑張る>

「かざまち」に週一回集まり販売すると、話が弾んだり、杖を付きながら、車いすを押しながらきてくれたり。「魚が食べられるのがうれしい」と言ってくれる。喜んでくれるので、私たちも励みになる。スタッフも話をしたり、仲間でお料理したり、一緒にまかないを食べたりというコミュニケーションが取れるというのが楽しみだ。

「げんき大崎」としては、「かざまち」の運営だけでなく、資源ごみ回収とか、秋のお祭りのサポートもしている。地域おこし協力隊の人を募集したり、移住したい人のサポート、窓口もしている。かざまちの改修には国の補助事業を活用して、リノベーションした。調理できる場所、食品を扱うのに衛生面も大事、営業許可もいる、その面ではちょうどよく漁協の倉庫を使えた。決まったときは、大崎地区の役員の方たちはじめ色々な立場の人が協力して取り組むことができた。


げんき大崎の活動






H25～新たな体制作り開始
H27 げんき大崎館「かざまち」開所

- 鮮魚・惣菜・野菜の販売
- 買い物弱者対策
- コミュニティの拠点づくり
- 食の体験イベント
- 資源ごみ回収
- 地区の祭りのサポート
- 地域おこし協力隊、移住者支援 等



和歌山で暮らし、未来へつなぐ。



会員 約35名
賛助会員 2名
理事 10名

「げんき大崎」は、設立当初から資源回収の売上や補助、体験イベントは参加費を取って、自主財源で運営してきた。かざまちも朝市などの販売売上で運営している。おばちゃんたちスタッフには多少のお小遣い程度の報酬を渡している。

今の地域おこし協力隊はもうすぐ1年になる。空き家を利用した宿泊施設を立ち上げようとしている。もうすぐ、12月頃には大崎に泊まる場所ができる予定だ。

<若者参加と、住み心地の良さを>

「げんき大崎」が順調に続けられているのは誇りではあるが、スタッフが少ない、なかなか若い人が参加してこない、もっと働きかけをと思う。ここができてから、行政関係、大学も一緒に取り組むことが増えているので、そういったつながりを増やして行って、盛り上げていきたい。

住民としては、ここでずっと住み続けたいし、自然、食、コミュニティ、家族のような集落、お互い気にかけて、声を掛け合うつながりが残っている地域なので、こういったことを守って、持続可能な地域づくりを進めたい。

「住み心地がいい地域」が目標。ここにずっといる人はもちろん、外から来た人もそう感じる地域にしたい。今後も地元の暮らしを豊かにするお手伝いと、外からの人たちとの交流のお手伝いしていけたらと思う。



〒649-0112 海南市下津町大崎 833-5

電 073-494-6233 メール info@genkioosaki.com

毎週土曜 10時朝市開店、2階は水～日曜午後オープン



実はこの日、夕方から豪雨となりました。高齢者は避難しなくてはならないほど。女性スタッフ始めたたくさんの方が集まる予定でしたが断念。西川さん以外にこのお二人がスピーカーとしてお時間をとってくださいました。

■山中誠也さん（げんき大崎会長・かざまち館長）



「大崎で生まれ育ち自営業を営んでいる。皆さんが自分たちの活動をスムーズにできるように・・・のサポート役。私も歳をとってもずっとここに住み続けたいという大きな願い、住み続ける為にはどうしたら良いかということの思い悩み、ひとつずつやっている」



■げんき大崎 理事 大岩宏さん（左）

「和歌山市内の出身。妻の実家が大崎。朝市ではいつもレジ打ちをしている」

【質疑】●感想・質問【】内は居住地、○答え、()内は回答者

●暮らしやすさにつながると思うが、買い物弱者対策というのが書いてあったが、どのように



充実させているのか。【東京都】

○週一回の朝市は、地元の人に新鮮な魚や野菜を提供したいという思いから。「げんき大崎」として買い物弱者をもっと大事にしたいと思っているが、「かざまち」以外の取り組みはまだできていない。例えば配食サービスとか、車を出して買い物に連れていくとか。この先いろんな取り組みしたいとは考えている。(大岩)



●大崎は天然のよい港。関西地区のヨット、モーターボートの人たちに注目したらどうか。土

曜日に朝市をしていて、これから宿泊施設もできるのだったら、ヨットの人達をうまく呼び込むと、今の売り上げの600万が軽く倍くらい行くのではないか。基本的な大崎の良さ、天然の良港ということを活かそう。最近船が売れているとの話も聞く、漁業権の問題もあるけれど、ポンツーン（浮き桟橋）を作って、関西、瀬戸内海方面の船の連中を一泊大崎に、ということで、呼び込むのも起爆剤になるのでは。【神奈川県】
○大崎は今も造船所があり、ヨットマンにとっては有名らしい。地区としてはそこに

関与してこなかったが、違う切り口ができる。常時5・6艘停泊しているし、ポンツーンを造れると思う。(山中)

●海のない池田町から。一人一人の方たちが自分のできることはなにか・・・ということで、コツコツと取り組んでいて、今があると思った。現場の皆さんの心が通じ合う中で、行われていると感じた。買い物や食事もだが、朝市などに来る地域の中の方と、外からの方との交流を楽しみにしている方も多いのでは。【北海道】

○朝市は地元の人たちが多いが、結構外の地域からも買い物、食事に来てくれている。体験メニューに繰り返し来てくれる方とはだんだん顔なじみになり、その方からまた紹介されて別の方が来てくれる、という形でつながりができている。移住では、大阪から一組のご夫婦がいらして、奥様は「かざまち」のお手伝いをしてくれていたり、畑をやってくれたり。二地域居住の形の方もあり、来た時には買い物や食事をしてくれている。そして、地元の人たちと一緒に宴会をしたりもしている。(西川)

●告知、情報の発信の方法は【東京都】

○Facebookとインスタグラム。インスタは地域おこし協力隊の方が大体毎日やってくれている。(西川)

●伊豆稲取在住なので、漁が身近だ。最近面白いなと思った試みがあった。たぶん大崎でもで



きるのでは。勝浦と稲取の港の朝市にFacebookのライブで買い物代行してくれる人がいる。いま、地域に人を呼ぶことが

できないので。ライブ配信の買い物って、
買い物弱者にも良いと思う。【静岡県】

●「げんき大崎」は地域を活かした素敵な活動だ。小学生が2人しかいなくて、中学生とか高校生はよそへ出ていくのか？子どもたちとのつながりはどうなんだろうと気になった。【東京都】

○中学生も高校生も何人かはいるが地区内には学校は無いので外へ出る。就職とかでも出ていく、結婚して地元になかなか住み着かない・・・。(西川)

○親になる世代の人たちがどんどん地区以外に新居を構えるケースが多く、どうしても子どももいなくなる、というのがこの20年くらいの傾向だ。(山中)

○大崎は斜面に立つ家も多く、なかなか車も置けない。車社会なのに・・・ということで不便さから大崎から出る人も多い。ここが大きな問題点。(大岩)



●これだけ素晴らしい活動をしていたら、これからの人たちも必ず魅力を感じるはず。これまでは都会的なことに目が向いていたが、地元を活かし、地元の方々が本気でやっているというのは、これからの若い世代に魅力になる。少し広げてそんな方々にもメッセージが届くといい。そういう広がりを持つポテンシャルがある。【東京】

○以前、20代、30代の人たちをイベントに招待したりしたが、あまり反応がなくて心

折れたことがある。(西川)

●あきらめずに、ぜひ。コロナとかで、みんないろいろ考え始めていると思う。世の中の状況が変わってきている。【東京都】



●「さんか・さろん」始めて以来の中継的なやり方で楽しめた。

「かざまち」の活動はお金が動く

「事業」だが、一年間の収支は？事業拡大がいいことかどうかわからないけれど、少し外に向けて、配送などのチャレンジはありそうだ。移住をPRしているとのことだが、住める空き家が何軒かあるのか？【東京都】
○「かざまち」の年間売り上げが600万ほどのうち皆さんに分けられるのが6分の1くらい。市場規模がなかなか拡大していないので、この5年くらいその感じだ。配送などはしたいが、スタッフ不足。専従は地域おこし協力隊であとは休みの日に手伝う形、事業拡大の余裕がない。

移住のための家は、空き家バンクの登録物件で探すのがなかなか難しい。移住希望の方とは、何度かここで話させていただいて、コミュニケーションをとったうえで、情報を新たに収集して物件を見つけて紹介し、住んでもらっている。物件ありきだと不動産屋さんになってしまうので、人がコミュニティに溶け込んでもらえるのか、と見極めるのも大事な要素だ。(山中)



●自分は山口県の瀬戸内海側の海辺の町の生まれ。瀬戸内海は戦後に工業化が

進み町が企業化していった。住民にも、企業の人が入ってきた。それを考えると地元の人たちだけでの活動はいい環境にあって、これからも広げていける状況だと思う。私はまちづくりと企業というのはなかなか両立しにくいように思っている。【神奈川県】



●地域おこし協力隊は今、各地で活躍しているがここで協力隊が途中で退任している、その理由が

分かれば教えてほしい。【和歌山県】

○これまで3人の協力隊が来てくれた。1人目の方は2年半ほど居たが、あと半年を残してパートナーの方と移って行ってしまった。もうひと方は自分の協力隊のイメージとこちらのイメージのずれが徐々に明らかになって、継続が難しくなった。3人目は、体調のことなどもあっての退任。

しばらく不在だったが、やはりいてくれると活動の幅ができていいので、昨年9月から4人目の方に来てもらっている。この方は台湾から来られているというだけあり

「日本で何かをしよう」という意欲が強く、ゲストハウスの開設を将来の自立に向けて準備したいという思いが最初からあったので、その思いにこちらもできる限りの協力している。大崎に移住者としていてほしいという願いを

込めて、一緒に活動している。(山中)

●個人的なことだが、私は東京の品川区に代々200年くらい住む、以前は大崎村だった。品川区大崎。すごくご縁を感じ、訪問したい。ほのぼの感がとてもうれしく感じた。【東京都】

●和歌山はとてもよく知っている、気候も恵まれて農産物もいろんなものがあるし、黒潮に恵まれて魚も素晴らしい。だから和歌山県人というのは細かなことに努力をしない、と受け止めていたが、今日のお話のような細やかな努力をしていらっしやることに感激。さらに参加のみなさんからのいろいろな元気づけられるような話があったと思う。大変楽しい会だった。【東京都】

.....
悪天候のなか「げんき大崎」の皆さんにはご協力をいただきました。コロナが終息し、宿泊施設もできたら、ぜひ皆で出かけましょう。下の写真のような、大崎の海辺での交流会に「スローライフ学会」も混ぜてもらいましょう。

(記録：事務局 丸山薫・小松崎いずみ・野口智子)

